

十七 倭人・愛人の語源は倭人・外人のことです

中国に現存する最古の地理書の『山海経』の第十八海内経に「東海之内、北海之隅、有国名曰朝鮮天毒、其人水居、倭人愛人」と言う一文がある。

東海は東シナ海で北海は日本海と思われる。朝鮮天毒の天は、韓国語でチョン（chon）と発音し、意味は「生地・素地」であり、中国語での意味も「天然・自然」である。毒は韓国語でトク（tok）と発音し、意味は「残酷だ・悪らつ」である。中国語でも「人の心を傷つけるもの・ひどい害をあたえる・損なう」という意味であるから、天毒とは「素地を損なう」という意味である事が分かる。「有国名曰朝鮮天毒」とは「朝鮮が始めからそなえもつ自然や土地にひどい害を与えるという名の国がある」と読むのである。

その国に住んでいる人は「倭人愛人」とある。倭は、漢音でワイと発音し、呉音でエ（エ）と発音する。現代北京語ではweiであり、韓国語ではwe（ウエ）と発音する。この韓国語の発音と全く同じ発音の漢字が韓国には「外」・「倭」・「歪」があるのであるから、倭人といえば外人・倭人・歪人と言っている事になる。

韓国で外人と言えば「部外者・管轄外の人・敵対する人」を意味するのであるから、倭人も「部外者・管轄外の人・敵対する人」という意味である事が分かるのである。

倭はハングル文字の発音記号では（oe）であり、外は（oi）であるが発音はともにウエ（we）である。愛は漢音でアイと発音し、呉音でオ・アイと発音する。外（gai）は韓国語で語頭の（g）音を発音しないのでアイ（ai）という発音になる。これを「愛人」と表記しているのである。ハングル文字のアイは二重母音であるからエ音に変化し、倭の発音ウエ（we）の発音と同じになるのである。倭人とは韓国語で外人のことを言うのである。外はガイ（漢）・ゲ（呉）・ウイ（唐）の発音であり、去声ではwaiであるから、この発音が韓国でのウエ（we）に繋がるのである。

新羅の郷歌である「慧星歌」に「倭理叱軍」とある。これはオリクン（oritkun）と読むもので、「倭理」が倭で、「叱」は（t）音であり「倭理」と「軍」との複合名詞に介入する連体助詞である。新羅時代には倭国をオリ（ori）と呼んでおり、oriの（r）音が脱落してoiになる。これが外のハングル文字の発音記号（oi）なのである。発音は外も倭もウエ（we）である。

十八 外人の語源は管轄外のことです

外の意味は「そと。ほか。ある範囲のそと側。また、その表面。遠い地方。自分の物ではない。自分に関係ないと考える。仲間ではないと思う。それ以外のもの」であり、部外とは「部署にかかわりのない立場」である。

倭理叱軍の倭理はオリ（ori）の発音で倭の意味であるが、他に「瓜」の意味もある

のである。瓜の日本語発音は、韓国語のオリの発音がウリ（u r i）に変化した事が先学の説でわかっている。o r iの（r）音が脱落してo iになるように、u r iの（r）音が脱落してu iになる。韓国語でウイ（w i）と発音する漢字に「委」が在る。ウイの意味は「上、表面、頂上」である。中国語では「すえ・はし」の意味である。表面という意味は「外」にもあることから、委も外も倭と同じ「部外者・管轄外の人」という意味と同じであることがわかるのである。

『通典』に「倭面土国」とある。倭は外と同じであるから「外面土国」・「表面土国」と言っていることになる。また、金印の「漢委奴国王之印」の委奴国も「表面土国」・「倭面土国」と同じになるのである。委奴国はウイラ国と読み、漢の管轄外の国という意味である。『魏志』東夷伝の冒頭に「・・・東方の地域については、公孫淵が父祖三代にわたって遼東の地を領有したため、天子はそのあたりを絶域（中国と直接関係を持たぬ地域）とみなし、海のかなたのこととして放置され、その結果、東夷との接触は断たれ、中国の地へ使者のやってくることも不可能となった。景初年間（237～239）、公孫淵を誅殺すると兵を船で運んで海を渡し、楽浪と帯方の郡を攻め取った・・・」とある。

倭人国は外人国（部外者国）であり、遥かなたの絶域の、海の表面に浮かぶ小島群なのである。これが中国の天子と直接関係を持っていない国の呼称となったのである。

倭は倭国内の行為でも使用されている。a「倭女王遣大夫難升米等詣郡」と、b「倭王復遣使大夫伊聲耆・掖邪狗等八人」と、c「耆与遣倭大夫卒善中郎将掖邪狗等二十人」の文中で倭の使い方が違うのである。aの「倭女王」と、bの「倭王」は卑弥呼のことであり、「大夫」は卑弥呼が建てた内閣の役人である。cの耆与は王になったばかりなので、自分の内閣をまだ建てていないのである。耆与は急を要する案件のために、管轄外である卑弥呼の内閣の役人を遣わしたのである。d「特置一大率・・・王遣使詣京都・帯方郡・諸韓国」とある所の使いも卑弥呼の内閣の役人であるが、e「太守王頎到官・・・素不和、遣倭載斯烏越等詣郡」とある所の主語は「太守王頎」であるから、郡の役人ではなく卑弥呼の内閣の役人を遣わしたのである。そのために倭（管轄外の人）を使ったと表現してあるのである。官とは「政府・朝廷。また、役人」の意味である。f「国国有市、交易有無、使大倭監之」とある所の倭は、市のある国々であるから、斯馬国や彌奴国などの各国々にある市場を、その国々の役人が監視しているのである。卑弥呼の建てた内閣の役人ではないので「おおくの管轄外の人を使って（使大倭）」と記録されているのである（これは第2案です）。

倭人の意味は「外人」であり、外人とは「部外者・管轄外の人・敵対する人」の意味である。自分の集落に仲間内の人があると入れてやるが、敵対する人が来ると排除する。弥生中期には稲作が行われており、種もみや鉄製の器具を盗もうとする人と阻止しようとする人で攻防戦が始まる。盗まれないようにと柵を設けて溝を掘る。その跡が環濠集落として発掘調査されているのである。

福岡県粕屋郡の江辻遺跡は、竪穴式住居11棟と倉庫5棟が検出されている。同様な環

濠集落が韓国の慶尚南道蔚州郡（キョンサンナムドウルヂュグン）の検丹里（コムタンニ）遺跡である。環濠土塁で囲まれた内部に竪穴式住居 2 1 棟が発掘されている。稲作の開始とともに造られ始めた環濠集落は、水田と種もみを守るために定住した人々を、部外者や敵対する人から守るためのものであると考えることが出来るのである。

稲作は、韓国から伝わったものであるから、検丹里遺跡の環濠土塁集落が古く、間もなく江辻遺跡の環濠集落が作られたのである。その後、短い期間に東北地方まで稲作文化が広まった。

弥生時代の中期から後期にかけて小氷河期であった。『三国史記』（第二、伐休尼師今十年<一九三>六月条）に「倭人、大いに饑（う）う。来たりて食を求める者千余人なり。」とある。また、（第二、儒礼尼師今四年<二八七>四月条）には「倭人、一礼部を襲い、火を縦（はな）って、之を焼き、人一千を虜にして去る。」とある。ここで言う倭人とは対馬・壱岐・北西九州に居住していた人々ではない。千人もの人を乗せて航行できる船は崑崙船があるが、朝鮮半島南部で航行していたのは百人乗りほどの商船であったと思われる。『魏志』倭人伝には「其の交来・渡海、中国に詣でるには、恒に一人をして頭を梳（くしけず）らず、蟻蝨（きしつ）を去らず、衣服垢汚（こうお）、肉を食わず、婦人を近づけず、喪人の如くしむ。之を名づけて持衰（じさい）と為す。」とあり、命を懸けての航行だったのであるから、窃盗や焼き討ち・略奪のための航行ではなく、対馬国や一大国にある「船に乗って南北に市糴する。」という表現の通り商船だったのである。

崑崙船は、越から南のマレー半島やインド洋を航行する商船であるが、紀元前 4 7 3 年に越王句踐は、呉王夫差を滅ぼした後に、船で北上して山東半島の南側の海岸の琅邪山に都を移している。ここから更に船に乗って山東半島を回って黄海に入れば、朝鮮半島や日本列島はすぐである。紀元前 3 3 3 年に越国が楚に滅ぼされて、越人が四散した時には朝鮮半島から北部九州へ行ったことが稲作伝播で確認できるのである。

『史記』列伝第 5 5 朝鮮には、「衛氏朝鮮という名の国名はなかった。楽浪郡の前身にあたるが、国名を忘れてしまうほど漢代の中国知識人は関心を示さなかった。周辺の諸民族は着々と自分たちの社会を発展させた。西北朝鮮に中国の燕国からの亡命者満を中心に国家が形成されていった。秦が燕を滅ぼしたとき、この地方は遼東郡の領域外であった。漢が紀元前 2 0 2 年に中国を統一すると盧縮を燕王とし遼河までを燕の領土とした。紀元前 1 9 5 年に満は一千余人を率いて朝鮮に亡命し、真番朝鮮の異民族や、中国の燕や齊からの亡命者を支配して王となり都を王楡（平壤）に定めた。遼東太守が満を外臣とし、満に遼東郡外部の異民族を支配させた。」とあるように、遼東郡の南側の領域外の地の人々を支配したのである。これは韓国側からは当然北側の領域外の地の人々であるから、管轄外の人・部外者のこととなる。これは外人・倭人ということになる。このことは『山海経』海内北経に「蓋国在鉅燕南、倭北。倭属燕」と記録されているので知ることができる。蓋の意味は「おお、けだし、たぶん、思うに、そもそも」である。国は「境界で囲んだ領域、諸侯の領地、国家組織」の意味である。鉅の意味は「丈夫な鉄、おおきい、間がおおきく

あいている」であるから、「思うに、境界で囲んだ領域は、間がおおきくあいている燕の南、倭の北に在る。倭は燕に属する。」と解釈できるのである。ここに韓の国名が無いので、遼東郡の南側の領域外の人々を倭と表現していることがわかるのである。

さらに、『魏志』韓伝に「205年頃に公孫康は遺民を帯方郡に収集（よびもどす）と同時に、兵を興して韓・濊を伐った。その後、（韓へ亡命していた）旧民たちも、しだいに（新興の）帯方郡へ集まることとなる。やがて、倭・韓は、ついに帯方郡に服属した。」とあり、韓の北側・遼東郡の南側に居た領域外の人々のことを倭と言っていることが分かるのである。

韓国の南側の倭人国は、北部九州にいる人たちであるが、韓国の領域の南岸にも倭人は居たのである。呉越や琉球から航行してきた商人で、対馬・壱岐に「市糶」と記録してある人たちである。市とは「おおぜいの人が物品の売買に集まる所」、糶とは「よい米をえらびとって買入れること」であるから、商船の停泊する場所や売買の場所には、商人が集まるのは当然である。

洛東江の上流には小白山脈があり、流域は肥沃であり舟運が発達していたのである。平壤から海を南下して開城や仁川へ航海し、漢江へ入り、南へ行くと鳥嶺の小白山脈があるが、ここには南へ流れる洛東江があるのである。漢江へ入らずに南へ行き、珍島を經由して東へ航行すれば巨濟島・釜山がある。巨濟島には弁辰瀆盧国が在ったところであり『魏志』韓伝には「瀆盧国は、倭と境界を接している。」と記録されている。釜山は狗邪韓国であるから、前述したC基準点（一大国）から「その北岸」とある所で、後世に「任那」と表現されている地域の直近である。

任那の任は、韓国語でイム（im）と発音する。この発音と同じ語があり、意味は「君臣・親子・師弟・親友・愛人・愛人など慕わしく想う相手の称」である。那はナ（na）と発音し、「集落・国」という意味であるから、任那とは「親友の集落・国」と言っていることになるのである。

韓国南部の倭人は「外人・部外者・管轄外の人・領域外の人」の意味であるが、商船で交易する重要な地域に「親友の集落」と言われる拠点を造っていたことが分かるのである。

十九 押坂の語源は岩境のことです

隅田八幡宮所蔵、人物画像鏡銘文に「癸未年八月日十大王年男弟王在意柴沙加宮時斯麻念長寿遣開中費直穢人今州利二人等取白上同二百旱作此竟」とある。ここにある「意柴沙加」を「押坂」と置き換えることが出来るのであれば、韓国語で「押」をアム（am）と発音するので「岩」と同音であるので「岩坂」と言っていることになる。岩坂・岩限・岩境の意味は「神の鎮座する施設・区域」であり、「神の鎮座する所」が「岩座・磐座」である。その様な場所は土を盛り上げた壇上であり、神壇と言っている。

韓国語でストウ（蘇塗）と言えば「首都」と「森林神壇」の意味がある。日本では「ひもろぎ（神籬）」と言っている。韓国からの渡来人が、岩座を岩神壇と感じ取り「岩塗（イワト）」と表現したのである。その発音はアムト（a m t o）であるが、日本語との融和文字となって、アマト（a m a t o）からヤマト（y a m a t o）となったのである。「天の岩戸」という表現があるように、韓国語と日本語の音訓を融和し漢字で表現したものである。

銘文中の斯麻は百済の武寧王（462年～523年）と言われているので「癸未年八月」は503年となる。

「日十大」は韓国語の発音で、p i（日）y o l（十）d a（大）と言ひ、ヨルダ（y o l d a）とは「(会議などを)開く・(窓を)あける・(蓋などを)取る・除く・(道などを)拓く・(関係を)結ぶ・(店を)開ける」と「実が成る・実る」という意味なので、「夜が明けて日を取り入れる」と言っていることになるのである。武烈天皇の悪政や虐待が終わり、継体天皇が暗黒政治を取り除き、国政を立て直す行動をとり始めたことを言っているのである。

「王年男弟王」とは、国政を取り始めた姿勢の思想を表現してある。韓国語では「王」はワン（w a n g）と発音し「往」と同音で、「これから先」という意味である。「年」はヨン（y o n）と発音し「念」と同音で、「深く思うこと」の意味である。「男」はナム（n a m）と発音し「他人、自分以外の人」との意味で、「弟」はチェ（c h e）と発音し「制」の意味である。「制」には「形を整えて定める。はみ出るところや、勝手な振る舞いなどを押さえる。人民を押さえて取り締まるきまり。天下のきまりを定める。みことのりを下す。」の意味がある。『魏志』倭人伝にも「有男弟佐治国」と「男弟」の表現があり、意味も同じである。

「開中費直」の費・値は「何かにまともにあたる。物の値打ちにまともにあたる。」の意味である。値は古代の姓の一種で国造（世襲の地方官）のことである。韓国ではカプ（k a p）と発音するし、カプチダ（k a p t i d a）は「高価、値打ちがある」の意味となる。カププ（k a p p u）の意味は「長者・分限者・金持ち」である。金官加羅の王は荷知（カチ）王と言っていた。

天皇の名に「開」が付く天皇は、欽明（天国排開広庭）天皇、天智（天命開別尊）天皇、聖武（天璽国押開豊桜彦）天皇であり、「中」が付く天皇は敏達（訳語田淳中倉太珠敷尊）天皇、天武（天淳中原羸真人）天皇である。武烈天皇直後の天皇であるから「開中」とは欽明天皇と敏達天皇のことを言っていることになるのである。

「穢人今州利二人等」の「穢」は、韓国語でウェ（w e）と発音し、倭・外と同音である。意味は「倭人・外人」であるから、「部外者・管轄外の人」である。「今」はコンと発音する。『周書』異国伝百済ノ条に「王の姓は扶余氏で於羅瑕と号し、民はこれ呼んで韃吉支（コンキシ）にいう。ともに中国語の王である。」とある。これは『日本書紀』に見られる「大主」を「コンキシ」と読むのと同じである。また、百済の近肖古王の近も「コン」

と発音する。これは先述したように、「奇生聖旨故」の聖旨はコンスと発音し「神の意向」の意味であることから、コンは「聖・大・王」のことを言っていることになるのである。「州」は「主」である。「利」は「吏」の事で意味は「筋道をたてて、きまった仕事をかたづけ人」である。「穢人今州利」は「管轄外の人で聖旨（神の意向）の役人」である欽明・敏達の「二人の天皇を遣わして此の鏡を作る」と読むことが出来るのである。

二十 入鹿の語源は「口車の帝位」のことです

蘇我氏が勢力を伸ばしていくのは、稲目が宣化天皇の時に大臣に任命されてからである。

稲目の「稲」は、韓国語でナラク（n a r a k）となるが（k）音は無声音となるので、ナラと聞こえるのである。この発音は「国」を表現するナラ（n a r a）と同音となる。「目」の発音は、現代語はヌン（n u n）であるが、古代語ではマリ（m a r i）であった。この発音は「頭」と同音なのである。

馬子の「馬」は、韓国語でマリ（m a r i）と発音する。この発音は「頭」と同音なのである。「子」はチャ（c h a）と発音し、意味は「さあ、と行動を催促する語。ようし、と決意を表す語」である。崇俊天皇は、この馬子によって殺されているのである。

毛人（蝦夷）の「毛」は、韓国語でモ（m o）と発音し、これと同音で「模」の語がある。模の意味は「ひながた。原型をまねる。見えないものを探り求める。のっとる。攻め入って奪い取る。奪って自分の支配下におさめる」である。「人」は、イン（i n）と発音し「認」と同音である。認の意味は「みとめる。じわりと心にやきつける。手間をかけたすえ、よかろうと納得する」である。

入鹿の「入」は、韓国語でイプ（i p）と発音し、同音の語がありその意味は「口。口ぐせ。人の話やうわさ・口車」である。鹿は中国語で「帝位のこと」の意味があるので「入鹿」とは「口先でうまい言いまわしをして、自分が帝王・天位と思っている」という意味になる。

入鹿は山背大兄（やましろのおおえ）王を殺したが、中大兄皇子・中臣鎌足に滅ぼされたのである。